

久米正雄『白蘭の歌』における満鉄表象とイデオロギー

— 死角としての愛路運動

川崎賢子

久米正雄「白蘭の歌」への従来の研究者の関心は、長谷川一夫と李香蘭の共演による映画、いわゆる「大陸三部作」（『白蘭の歌』『支那の夜』『熱砂の誓ひ』）の最初の作品の〈原作〉としてのそれにとどまっていた。本研究は、「白蘭の歌」を小説テキストとしてあらためて焦点化し、そこに、外地における鉄道である満鉄（南満州鉄道株式会社）表象と、満洲国建国から日中戦争に至る時期の日本の大陸進出と軌を一にした満鉄イデオロギーを解読する。小説「白蘭の歌」において、満鉄表象はツーリズムのまなざしと植民地移民の動向とを示していた。満鉄イデオロギーは、植民地の交通、開拓民の移動、軍事行動の拡大とともにあり、それを正当化し鼓舞するものであった。しかしながら、これを現地満洲国の日本語文学の言説ないし満鉄社員の言説と比較するなら、満鉄のインテリジェンス機関としての側面の見落としという興味深い欠落が指摘される。